

ポバース記念病院 校内研修

— 脳性まひのある児童の書字指導についての事例検討 —

本校訪問教育部

1 はじめに

ポバース記念病院に入院中の児童生徒の訪問学習においては、医教連絡会やリハビリテーション部との連携シートなどを通して情報を共有し、連携を図りながら授業を行っている。教員がリハビリテーションについての正しい知識を持ち、より良く病院と連携しながら教育的支援を行っていくための機会となるよう、今年度初めてポバース記念病院リハビリテーション部の作業療法士の方に講師として参加していただき、研修会を実施した。

2 概要

日時	令和5年8月2日(火) 14:00~15:00
場所	本校2階多目的ホール
講師	作業療法士 川野 すぐる氏
対象	当校教員
テーマ	脳性まひのある児童の書字指導について



3 内容

(1) ポバース記念病院とリハビリテーションについての紹介

主に理学療法 (PT)、作業療法 (OT)、言語聴覚療法 (ST) を行っている。リハビリを行う際には、姿勢を重視しており、リハビリの場だけでなく日常生活に汎化していくことを意識して実践が行われている。

(2) 事例検討 脳性まひのある児童の書字指導について

児童の実態報告、学習の様子動画をもとに、適切な指導支援についてグループに分かれて検討を行った。「教育的支援」と「疑問点」についてそれぞれ意見を出し合い講師より助言をいただいた。

(3) 質疑応答

- ・分度器、コンパスなどの道具の使い方の適切な支援について
→道具の工夫をすることが支援として最初にすべきことである。分度器の場合は滑り止め、コンパスは握って回すだけで使えるものなど工夫された道具を使用すると良い。
- ・腕が動きすぎてしまう場合にはどのようにすれば良いか
→児童生徒の状態によるが、腕が支持面に着くように押さえてみるのも一つの方法だろう。
- ・腕の緊張が強い場合の対処法
→手首、指先からゆるめていくと良い。手や腕を巻き込むように緊張が入る場合は、伸ばそうとすると逆効果になるため、さらに曲げてあげることで伸ばしやすくなることもある。
- ・多動で学習に取り組みにくい児童生徒の対応について

II 校内研修

→先に体を動かす活動から始める。呼吸と合わせて体を動かすことでリラックスを促すことができる。

- 文字の大きさの乱れ、筆圧のばらつきがある場合について
→筆記具、補助具の調整が必要と思われる。
- 発語がない場合のコミュニケーションについて良い方法はないか
→触れ合うことでの挨拶や模倣の練習、本人が出しやすい形で Yes、No を表すことができるサインを決めるなどしていくと良い。言語聴覚療法の最初の段階では食べ物など本人の中で明確に好き嫌いが出やすいものを探していく。

4 まとめ

今年度は作業療法士の方に来ていただき、リハビリテーションで行われている実践についてお話を聞かせていただくとともに、書字指導についての事例を検討し、ご意見をいただいた。事例検討を通して、リハビリテーションの観点を取り入れた教育的支援について検討する機会を持つことができた。今後も病院とより良く連携を図りながら入院中の児童生徒への授業実践を行っていく。